（様式1）　　2019　年度

1　自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2874700426		
法人名	かすみ福祉サービス有限会社		
事業所名	グループホーム赤とんぼ		
所在地	美方郡香美町香住区守柄1351番地		
自己評価作成日	令和元年12月28日	評価結果市町村受理日	令和2年3月31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/28/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2874700426-00&ServiceCd=320&Type=search

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　はりま総合福祉評価センター
所在地	姫路市安田三丁目1番地　姫路市総合福祉会館内
訪問調査日	令和2年1月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

1. 介護福祉士は、現在4名、介護専門員は、2名ですが、さらに、資格者を増やしたい。（結果的に、質の向上につながる。）
2. 現在、原則週休3日制、夜勤勤務は原則週1回で十分な休憩を与える事。（結果的に、質の向上につながる。）
3. 賃金について、日勤者は会社社長よりも多い。（結果的に、質の向上につながる。）
4. 生活困窮者には、支払い能力内を目指し、また実行しています。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

山間部にある事業所は、自然豊かな環境の中に民家を改修し、「家庭的」な環境のもと利用者や地域の方を含めた支援が行われている。近隣には医療や商業などの社会資源が少ない環境にありながら、管理者や事業所職員は地域との助け合いを掲げ、事業所主催の行事を通して、「地域住民と互いに助け合う」仕組みを構築させている。設立時の思いである「人と地域への恩返し」を念頭に、利用者の経済的な課題についても、支払いが可能な範囲で行えるよう、開設当初から変わらない運営方針を継続されている。管理者のみならず、職員全員がチーム一丸となって、さらに利用者の暮らしにおける質の向上に向けた取り組みに期待が持てる事業所である。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および第三者評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	問題点をモニタリングして解決、または未解決事項をさらに討議する。	設立の思いである「人と地域への恩返し」を基に理念が構築されており、昼は事業所内での掲示されている。職員は常に立ち返りながら日々の支援に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との交流は、高齢者が多く交流はあまりありません。	利用者の重度化が進む中、各種行事は住民に来て頂く主旨で企画されることが多くなっている。これまでお地蔵さんや門松を設置するなど、事業所が地域の集いの場としてなるよう取り組んでおり、地域ではそれらが根付いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	時々、94歳の老人の認知機能検査依頼があります。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	町の指導を受け実践を踏まえ行っている。	管理者、家族代表、民生委員、元区長などの地域の知見者と、行政からは役場の福祉課が構成員となり、運営推進会議が2か月に一回開催されている。利用者の活動に対する現状報告や病気、薬など医療に関する勉強会、身体拘束適正化に向けての事例検討、介護報酬の説明などもされるなど、双方向からの意見交換が確認できた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村の協力関係は実践を踏まえ行っている。	市では地域密着型サービス事業所連絡会が年に2回開催されており、管理者が参加している。地域の人口減が更に進む中での今後に想定される課題や、認知症ネットワーク、災害時対策などが議題として挙げられ、一体的な体制作りに向けて協議されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に1～2回は研修会を行っている。	身体拘束廃止に向けての指針・同意書が整備されており、管理者は行政主催の研修会に参加し、昼のミーティングで職員に対し、伝達講習を行っている。現在、対象者が1名(つなぎ服着用)居られ、運営推進会議などで状況報告を行い、廃止に向けて、また衛生面の改善策の検討も含め、その適正化について検討を重ねていることが確認できた。	

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	9人で2人は完全寝たきり状態で女性ばかりですので、虐待はありえない。	職員は、日々の中での気付きや意見を気軽に言い合える関係が出来ている。利用者の、疾患から生じる精神的不安定を因とする暴言など、多くの事例に対して、管理者を中心に、医学的根拠を昼の職員ミーティングの中で勉強し、職員間で共通理解を行う機会がある。管理者は「そっとして、さりげなく支援する」の手段を伝えている。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度は問題があると思います。「社協」「郵便局」を利用しています。	現在、2名の利用者が社会福祉協議会の日常生活自立支援事業を活用されている。また家族が遠方の利用者の出納を、地元の郵便局と連携し、管理している。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明を理解されていると思います。	管理者が担当し、事業所の理念、サービス内容、利用料などの重要事項を説明し、同意を得て契約を締結している。 今後は、身体拘束廃止に向けての意義や事業所の指針、また重度化への対応などについては、共通理解に向けて更に踏み込んだ説明と確認を行い、家族や職員に共通理解からの準備に繋げてほしい。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	推進会議のメンバーに必ず家族がいますが、意見はありません。	毎月の介護計画の見直し時に、家族から意見の抽出を行っている。家族が遠方の方が多く、且つ高齢化も目立ち、事業所への来訪は少なくなっている現状がある。定期に開催される運営推進会議への参加依頼と合わせて、意見聴取の機会を増やす手段を検討中である。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	昼の食事時に色々話しています。	管理者は、常に職員と近い距離・立場を心掛けており、毎日、職員ミーティングを兼ねて昼食を共にしている。その中では、研修の伝達講習や、医療の勉強会、意見聴取などが直接に、タイムリーに行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現在、ケアマネ2人、介護福祉士5名で将来、ケアマネ2名めざし、介護福祉士1名をつくりあげたい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	○○○の研修はできるだけ参加する様にしている。		

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	町を中心にして参加しています。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	失認、失行も多く、関係作りも充分とは言えません。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所平均は4～5年もしくは、それ以上であり、家族の不安などを言ってくる人はいません。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現在の所、全くできていません。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	歌などは協力しあっています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との関係は大切ですが、不充分です。		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	時々、生まれた地域につれていきますが、利用者家族はあまり協力的ではありません。逆に叱られます。	地元の利用者は少なく、家族や友人も遠方の方が多いなか、高齢化と相まって、来訪者は少ない。地元の利用者については、独居で在宅されている家族へ、食事を準備し配達するなど、介護保険サービスの枠に捉われない視点での見守り活動も兼ねた取り組みが行われている。	

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係はとても大切です。座る席なども深く考えています。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	そんなことはできません。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	検討していますが、能力の問題もあり、困難です。	重度化が進み、意思が表出されない利用者が多くを占めてはいるが、日常的に利用者との関わりを大切に、コミュニケーションを大切にした支援が行われている。職員間での情報共有はお昼のミーティングを通じて情報伝達が行われている。現在、入手された病状や心身の状況やケアの方法等については、様式「利用者日々体調状態表」を運用し、情報共有に努められている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	努めています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	努めています。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員と共に共有し、作成している。	管理者は職員間で運用される「利用者日々体調状態表」及び「業務日誌」などのケース記録を基に、日勤者と夜勤者から状況を抽出し、介護計画書に反映している。加えて介護計画書は、変わる利用者の状況を追記し、家族に毎月送付している。	引継ぎの仕組みは整備されているが、書面だけでのやり取りでなく、直接に職員や家族の意見を聴取するサービス担当者会議を開催し、その記録も整備されたい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	見直して活かしている。		

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	多機能化はどういう事かわかりません。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	「梅干しづくり」「トチモチ」作りなど行っています。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	介護福祉士とケアマネのペアーにより受診しています。	契約時に、これまでのかかりつけ医の継続か、または事業所の協力病院へ変更されるか、ご希望をお聞きしている。定期・緊急も含めて、受診については地理的要因と家族が遠方に居られることが多いので、管理者と現場の介護福祉士とで付き添い支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	「往診」依頼などしています。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	診療所の職員とナースとの関係づくりをしています。	地域では受け入れ医療機関が限られており、緊急時には地理上の問題から、ドクターヘリの出動も見込め、迅速な体制が確保されている。搬送先には管理者が駆けつけ、関係者と連携し、情報を家族と共有している。退院前には管理者もカンファレンスに出席し、受け入れ環境の確認と整備を行なっている。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の家族に記入してもらっています。	終末期支援までを視野に入れ、受入対象を限定せずに全ての身体状況に対応する方針が取られている。看取りについては、医師からの見解が出されたタイミングで、家族からの延命に対する意向を確認し、職員間で共有しているが、何れは迎える終末期に対して、家族が向き合うキッカケとするためにも、契約時にうかがう機会を設けていく予定である。	重度化に伴って、何時起こるかわからない急変時に対する対策として、事業所でできることを整理したうえで、緊急時における利用者や家族の意向を確認する取り組みに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	「脈拍」「SPO2」で対応している。直近の例では「脈拍（133）」「SPO2　73」で急変に対応しています。		

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	「タンカ」を購入する予定です。年2回は消防署の指導を受けようと考えています。	事業所内では地域のハザードマップが閲覧可能である。地理上からは土砂災害と雪のリスクが想定される。大掃除と合わせた避難訓練は年に3回行われており、避難先として近隣の民家を定めており、地元の救援者も確保されている。利用者は全員が避難することとなっている。避難の移動手段として、「タンカ」や「リネンシーツ」の活用などが検討されている。利用者が避難を終えたタイミングで地元住民も手伝っての事業所内の大掃除が行われる。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけは行っています。	職員は「利用者の人格・人権を最大限に尊重する」という理念を念頭に置き、関わりに中では特に「丁寧な声かけで敬う」ことを日々実践している。また、昼食を兼ねた職員ミーティングでは、管理者による接遇研修会の伝達講習が行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「バイステップ」の「非シンパン的態度」はなかなかできません。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設の担当者の発案が多いです。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	「おしゃれ」まではできません。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事、片づけは1人の人が手伝ってくれます。	献立は全て事業所内の調理で、朝はパンと米飯の選択が可能で、昼食は曜日毎に固定で定め、夕食は地元で獲れた新鮮な魚が毎日提供されている。普通食の他、刻みなどの嚥下食にも対応している。週を2名の職員が分担し、片付けなど一部を利用者と行なっている。利用者は採光の良いリビングでテーブルを囲み、職員と会話をしながら時間をかけて召し上がっておられた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	「パン食」オンリーの人がおられますが、それでよいのか迷ってます。		

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアーは毎日しています。		
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	「排泄チェック」は毎日しています。	利用者の重度化が進み、現在は全員がオムツ着用であるが、居室にはポータブルトイレを設置して、職員はその人のタイミングを共有し、可能な限りスムーズな誘導を心がけている。 身体的な理由で居室で生活されている方については、こまめな排泄介助（オムツ交換）によって、出来る限り利用者への不快感が残らないよう支援されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的に「マグミット」を使用しています。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員の都合が多いです。	個浴漕が設置されており、一人につき週に2回、午後2時から入浴の機会を設けている。利用者毎に担当介助者を固定することで安定した経過観察がおこなえている。脱衣場にはエキザルベ等の軟膏を常備しており、日頃から皮膚疾患に留意している。重度化した場合にはシャワー浴や清拭などで対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	徘徊不眠に悩んでいます。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	「薬剤師」の職員がおりますので充分できていると思います。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	気分転換はあまりできていません。		

自己	第三者	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	病院通院支援などがありますが「サクラ」見物はあります。	利用者の重度化や寒冷地特有の積雪、低気温など、設備、環境、人員または利用者の状態などから日常的な外出には至っていない。春先など気候の良い時には、散歩をすることもある。また、月に1回の定期の受診の際には帰りにドライブを兼ね、気分転換する機会としている。また天候の良い日には窓を開放し、部屋から地域の風景を見ながら、可能な限り外気を感じる機会を日常において取り入れるようにしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つことはしていません。「物とれら妄想」をさけたいのです。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	そんな能力のある人は、２人はいます。手紙のやり取りは、していません。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	「地ぞう」さんの花などで楽しく、季節感を感じる様にしています。	民家を改装した建物内は、どの場所も採光が良く、スロープや手すりも配慮されている。廊下には開所当初からの利用者の写真や、行事の記録などが掲示され、内装の色合いと相まって、和んだ雰囲気が感じられた。リビングには、テレビや炬燵、キッチンがあり、古民家を改修してつくられた、グループホームとして生活感あふれる共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	同じ部落の人が多いので少しは出来ていると思います。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	写真などの工夫。	居室にはベッド、クローゼットと空調が備付られており、家具類は事業所のものが一部提供されているが、可能な限り使い慣れた物や趣味の物が持ち込み可能となっている。寒冷地であるが、居室内の室温管理や空気清浄器も備付られ、利用者が快適に過ごせるような作りとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	家族に依頼していますが、できていません。		